

えんにしても、せめて行平にでも容れて來たら何ふや。おまけに椽が破けたア。見苦いがナする事が……オ、オ。側へ溢れて……。」

『沸いた物や依て……。』

『チヨツと拭いて來ると宜えのに。手綺麗にしたら鯉のお汁で、中々洒落れた……何や。こら麥飯のお粥や無いかい。』

『探してたら鯉が出て來るやろ思ふね。麥飯で鯉釣る……。』

『莫迦にすない。何や妙に氣兼しやがと思ふた。オイ皆見い。麥飯のお粥持つて來よつたで。吉やんとこは何持つて來るね。』

『そ。う。め。ん。は。不。可。ん。か。』

『宜えがな。淡ざりと好え物や、持つといで……何や是れは。醫油や無いか。』

『左様や。副菜の無い時は此奴で辛抱するのやが、中々箸では挾そうめん。』

『あ、は。そ。う。め。ん。か。い。ナ。酷い物持つて來よつたナ。そら斯んな物挾めるかい。虎やんは何や。』

『オイシヨ鶏卵の巻焼。』

『ソラ大根漬やがナ。』

『色が宜ふ似たア。』

『味が全て違ふがな。』

『そこは氣で氣を養ふのや。』

『ソラ何吐しやがね……作たん處は何が有る。』

『何云われると甚い辛いねけど、餅の附け焼が十五六本あるね。』

『ホホー。そら濟まんア。お前とこのが一番上等や。皆作たんに禮云ふとけ。大きに御馳走はん。』

『そんな事云ひないナ。斯うしてりや御互ひや。有る時には喰べて貰ふ代りに無い時は饗れるね。禮云ふたり仕られるとホン辛いや。それから蒸鯉の煮いたんが七八ツと、煮豆が小一升有ると思ふね。』

『氣の毒なナ。オイ皆禮云ひんかいナ。仰山出して呉れるがナ。ほんまに濟まん。』

『さ夫れを云ふてならウのに。辛いア。其他に高野豆腐が十二三と、鳥貝の酢味噌が少しに蛸の足が六本残つたア。それから巻ずしが何でも十本餘り……。』

『オイ皆丁寧禮云わなアカんぞ。作たん一人で長屋中の辨當持て呉れる様なもんや。コラ釜ぞ。もつと整然ドタマ下げんかい。』

『叶わんなアそふ云はれると……御互ひや云ふてるのに……まア兎に角品物持つて來るわ。』

『チヨツと待ち。お前にばかり物出さして、身體まで使ふたら濟まん。此處に居て。オイ皆お來でや。作たん許から御馳走をお手繰りて運ぶのや。お前何キヨロくしてるね。』